

モニタリング実施地および生物種の概況

- ・7 調査者による 11 か所のモニタリング結果を公開している。対象種は、各団体が注目し、定期的な観察、手入れにより見守っている種を任意に選定している。
- ・定期的・継続的な株の計数や観察を行うことが可能な、植物と鳥類、昆虫を中心に今年の生育・生息状況が報告されている。
- ・植物はアマナやアズマイチゲ、ヒメニラ、ヤマエンゴサクなどの雑木林の環境を好む早春植物のほか、里山管理によるリアクションに加えて、人による掘り取りによっても増減するキンラン、ギンランなどの山野草に注目している。また、相模川の河川敷では地域を象徴する絶滅危惧種であるカワラノギクと、その生育環境が競合する恐れのある特定外来種のオオキンケイギクやシナダレスズメガヤについてもモニタリングされている。
- ・鳥類はツミやオオタカなどの猛禽類、キビタキやアオゲラなど注目が集まりやすい種について、繁殖状況に着目しているほか、特定外来生物に指定されているワカケホンセイインコやガビチョウの生息状況も報告されている。
- ・2019年以降、いずれの調査地でも、度重なる台風の上陸・接近や、キアシドクガの大発生などの特異な事象、さらにここ数年注目されている、カシノナガキクイムシによるコナラの枯死など、長期的に見ても大きなエポックとなりうるイベントが複層的に環境へインパクトを与えている。
- ・自然界の生物の消長は人間の想像以上に振幅が激しく、1年ごとの増減で一喜一憂すべきではない。しかし、そうした年ごとの変化をとらえることをとおしてのみ、長期的な傾向を読み取ることができる。地域の特性、特色を把握することが生物多様性の基本であることから、今後もモニタリング調査を継続していきたい。また、現状では市内で活動する団体等をベースにモニタリングを実施しているが、今後は自然環境観察員制度との連携を模索するなどして、地域の自然環境を網羅的にモニタリングする方策を検討すべきであろう。

モニタリング結果の概況

- ・ヒメニラは最新(2022年)の神奈川県レッドリストにおいて絶滅危惧 B類とされ、神奈川県内では相模原市内にしか自生地は確認されていない植物である。中でもモニタリング調査が行われている境川斜面緑地においては安定的に多数の株の生育が確認されており、極めて重要である。調査では詳細な株数が記録され、樹林地の管理状況や他の植物との競合などによって増減が激しい植物であることもわかってきた。今後も継続して生育状況の把握が行われることが望まれる。
- ・アマナやアズマイチゲは境川の斜面緑地の他、木もれびの森や東林ふれあいの森などで詳細なカウントが行われている。エリアにより傾向の相違や、年ごとの増減はあるものの、おおむね現状が維持されている。これは順応的管理の導入など、その個体群の状況に応じた周囲の植生の管理等を行っている成果と言える。

- ・キンランやエビネは植生管理や、近年のキアシドクガによるミズキの枯死、ナラ枯れなどの要因によって林内が明るくなったことで、市域全体で開花株が増加傾向にあった。しかし、2021年の記録からは、増加傾向がやや頭打ちとなったことが読み取れるが、数年の比較では言い切れないため、今後の動向を注視したい。
- ・ヤマエンゴサクやヒメニラ、ヤマブキソウ、レンブクソウ、イチリンソウは緑区の山麓域以外では境川の斜面緑地に限って分布する植物である。人による掘り取りなどの阻害要因は現状では確認できないが、周辺環境の変化により大きく株数が増減する傾向がある。特にヤマエンゴサクは消長が激しいことがモニタリング調査からもわかる。
- ・境川沿いで繁殖期にアオバズクの鳴き声が継続して聞かれているが、期間をとおして安定して記録されてはいない。鳴き声による確認がしやすい種類であるため、今後も確認状況を注視していきたい。
- ・トンボ類では、アサヒナカワトンボは各地で比較的安定して発生していると考えられるが、コオニヤンマなど記録が途絶えているものもあり、今後の記録が注目される。
- ・オオキンケイギクなどの特定外来生物は、場所によって増加傾向にあり、すでに広く生育、生息している。特に河原ではシナダレスズメガヤなど、絶滅危惧種のニッチを圧迫していることが報告されており、対策が必要である。
- ・特定外来生物のガビチョウはすでに市内全域に広く定着している。今後もこの傾向が継続するのか、また、在来種との競合などは見られるのかなど、注意深く見ていく必要がある。
- ・ワカケホンセイインコは局所的に分布しているが、市内ではやや増加傾向にあるようにも考えられる。こうした種については、モニタリング調査の対象地域を増やすか、あるいは自然環境観察員制度など既存の自然調査のしくみと連携するなどして把握していく必要があるだろう。